

児童期の社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請の関連

石 井 僚	奈良教育大学学校教育講座 (心理学)
中 山 留美子	奈良教育大学学校教育講座 (心理学)
黒 松 拓 馬	奈良教育大学学部在学
廣 瀬 由 衣	奈良教育大学学部在学
藤 井 理 沙	奈良教育大学学部在学
布 野 詩 織	奈良教育大学学部在学
又 野 裕 成	奈良教育大学学部在学
宮 本 真 衣	奈良教育大学学部在学

The Relationship between SES, Attachment, and Help-seeking in Childhood

ISHII Ryo

(Department of School Education, Nara University of Education)

NAKAYAMA Rumiko

(Department of School Education, Nara University of Education)

KUROMATSU Takuma

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

HIROSE Yui

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

FUJII Risa

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

FUNO Shiori

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

MATANO Yusei

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

MIYAMOTO Mai

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Abstract

The present study investigated the relationships between SES (Socio-Economic Status), attachment, and help-seeking in childhood. A total of 162 elementary school students responded to a questionnaire survey that assessed SES, attachment anxiety, attachment avoidance, and help-seeking. The results of a path analysis showed that SES is directly associated with seeking a person to get help. Regarding indirect association, the descriptive statistics and the results of a correlational test indicated a nonlinear association. In sum, while SES is positively related to attachment in children from all but the highest socio-economic groups, among children from the highest socio-economic group, attachment anxiety and avoidance are high. Furthermore, attachment

anxiety is negatively related to revealing the reason for wanting help. Those results are discussed from the parenting point of view.

キーワード：社会経済的地位、アタッチメント、援助要請

Key Words: SES, attachment, help-seeking

1. 問題と目的

1.1. 貧困の現状と社会経済的地位のもたらすもの

日本の学校教育現場が抱える問題の1つに、貧困の問題がある。17歳以下の子どもを持つ家庭において、家庭の所得が、等価可処分所得の中央値の半分未満である世帯の割合、いわゆる相対的貧困率は13.9%にのぼることが報告されており（厚生労働省, 2016）、これはおよそ7人に1人の子どもが、相対的貧困層にあたることを表している。先進国の中でも日本の子どもの相対的貧困率は高く（Unicef, 2012）、その対策は急務である。

こうした貧困を含む社会経済的地位は、子どもの学習や発達、適応などと多様に関連することが示されてきた。例えば学力について、文部科学省の全国学力・学習状況調査を中心に小学校6年生5000人以上のデータを分析した耳塚（2009）では、概して世帯年収の高い子どもほど、国語や算数の平均正答率が高いことが示されている。また、社会経済的地位と子どもの発達に関してレビューしたBradley & Corwyn（2002）では、生まれてから成人するまでの子どもの認知的、社会情動的な発達やwell-beingと社会経済的地位との関連が指摘されている。さらに、社会経済的地位の階層間で子どもの健康格差が生じている（阿部, 2012）ことに加え、社会経済的地位の低い子どもは、そうでない子どもと比較して2-3倍、精神的健康上の問題が生じることがメタ分析の結果から示されている（Reiss, 2013）。学校現場においても、松岡（2015）は、社会経済的地位と子どもの学校適応との関連を示している他、Tippett & Wolke（2014）のメタ分析の結果は、社会経済的地位といじめとの関連を示している。社会経済的地位は、学校内外での子どもの適応的な学習や発達と関連することが明らかとなっており、こうした実証知見に基づいて対策や対応をしていくことが重要と考えられる。

1.2. 社会経済的地位と援助要請

日本の子どもを対象とした研究知見は多くはないものの、上述のような社会経済的地位と子どもの様々な側面との関連は、社会経済的地位の低い子どもの抱える問題を示しており、その対応が求められる。しかし、こうした社会経済的地位の絡む問題への対応には様々な困難があると考えられる。

社会経済的地位に関する諸問題への対応の1つの難し

さは、社会経済的地位の様相を把握することが容易でないことにある。教育学歴社会が日本で進展していくなかで、階層文化の差異が把握しづらくなったことや、学校文化自体も階層的に中立的とみなされるようになったことで、教育における不平等を捉える視線は、学歴による不平等へと向けられ、学歴取得以前の不平等を見えにくくさせたとされる（荻谷, 1995）。同じく荻谷（1995）は、能力や学力の階層差を問題視すること自体、めぐまれない階層の子どもたちに差別感を与える教育認識として忌避されるようになったことを指摘している。さらに政治家や官僚でさえも世論を恐れ、十分に対応が進んでいるとはいえない現状もうかがわれる（阿部・鈴木, 2018）。社会経済的地位と子どもの様々な側面との関連に目をつむることで差別感を持たないようにする社会の風潮が、社会経済的地位の把握を困難にさせていると考えられる。

社会経済的地位と子どもの諸側面との関連の問題視を忌避する風潮と相まって、社会経済的地位の低い子どもは、その社会経済的地位の低さを表に出さないようになっている現状がうかがえる。NHKスペシャル取材班（2018）は、子どもへの調査や実生活への取材から、貧困世帯の子どもであっても、スマートフォンを所持し、流行のファッションに身をまとった外見をすることなどによって、一見すると貧困とは結びつかないようにしている実態を示している。こうした現代の貧困は、「見えない」貧困として指摘され、その可視化の重要性が指摘されてきている（e.g. 青木, 2010）。

外見的な「見えなさ」に加え、社会経済的地位は援助要請と関連することが示されており、行動面での「見えなさ」があると考えられる。Calarco（2011）は、社会経済的地位と援助要請との関連について、公立小学校の子どもたちを対象に、エスノグラフィーの手法を用いて縦断的に検討している。その結果、社会経済的地位の低い子どもと比較して社会経済的地位の高い子どもは、クラスの中で教師に対してより多くの援助を要請していること、また援助を待つのではなく、話をささげても声を上げ、教師に直接アプローチする手法を多く取ることなどが明らかにされている。また、そのような明確な援助要請を積極的に行うことで、結果として援助を得るまでの時間が少なくなり、よりよく課題等をこなすことができていることも示されている。援助要請は、学習内容の理解（山路, 2017）などを含め、子どもの適応と関

連することが多く示されており (e.g. 本田・新井・石隈, 2015), 貧困と子どもが抱える諸問題との関連にとって重要な要因と考えられる。貧困を見えなくする要因として, また貧困から諸問題を生み出していく要因として, 援助要請と社会経済的地位との関連を実証的に検討していく必要がある。

1.3. アタッチメントとの関連

社会経済的地位は, 経済, 社会, 文化, 人的資本に関わる資源にどの程度アクセスできるかを表すものという定義 (National Center for Education Statistics, 2012, p. 14) から, それが低い場合には人的資本に関わる資源へのアクセス可能性が低く, 援助要請できないという直接的な関連が考えられる。加えて, 幼い頃から人的資本に関わる資源へのアクセス可能性が低い環境で育つことにより, そのアクセス可能性を常に低く見積もったり, 他者に対する期待や自己に対する価値的な信念を低く持ったりすることで, 援助要請をしないという間接的な関連も考えられる。幼い頃の人的資本に関わる資源は主に養育者に関わるものと考えられるため, 養育者との関係性を通して発達させた他者や自己に対する信念, 期待を介した関連の可能性が考えられる。

養育者との相互作用を通じて発達させた自己や他者に対する信念や期待といった表象の質は, 個人のアタッチメントスタイルを規定するとされている (Bowlby, 1988)。アタッチメントスタイルとは, 自分は愛されたりサポートを受けたりする価値のある存在かといった信念を反映する自己モデルと, 他者は信頼でき, 利用可能かといった信念を反映した他者モデルの2次元をさす (Bartholomew & Horowitz, 1991)。この2次元は, アタッチメント対象に見捨てられるかもしれない不安であるアタッチメント不安と, 頼ったり頼られたりする親しい関係を回避することであるアタッチメント回避に対応するものとして尺度化がなされている (Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。これらアタッチメント不安とアタッチメント回避を介して, 社会経済的地位は援助要請と関連している可能性があり, これらの関係性を明らかにする必要があり。

日本国外においては, 社会経済的地位とアタッチメントとの関連, アタッチメントと援助要請との関連が個別に示されてきた。例えばDujardin, Santens, Braet, De Raedt, Vos, Maes, & Bosmans (2016) は, 子どものアタッチメント不安, アタッチメント回避は, 親への援助要請までの時間を長くし, 結果的に抑うつになることを観察と調査から見出している。NICHD studyの大規模サンプルにおける乳児とその親のデータを分析したBakermans-Kranenburg, vanIJzendoorn, & Kroonenberg (2004) でも同様に, 社会経済的地位とア

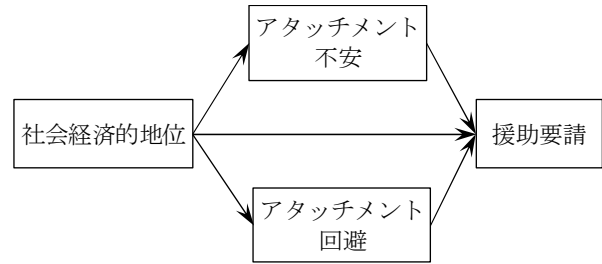


Figure 1. 社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請の関連の仮説

タッチメントの関連が示されている。他にも, 社会経済的地位の低いコミュニティで生活する中学生から高校生の子どものアタッチメント不安の低さと家庭の収入の高さの関連を示している (Rawatlal, Pillay, Kliever, 2015)。アタッチメントと援助要請についても, 112人の生徒を対象として調査を行ったMoran (2007) は, 援助要請への意志と関連する要因の1つとして, 安定型のアタッチメントスタイルを挙げている。こうした知見から, 社会経済的地位は, 援助要請との直接的な関連に加え, アタッチメントを介した間接的な関連を持つと考えられる (Figure 1)。

1.4. 本研究の目的

以上のことから本研究では, Figure 1の仮説モデルの検証を通して, 社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請の関連を検証する。援助要請にはいくつかの側面があり (e.g. 本田他, 2015), 援助要請行動の実行量のみでは, 個人の適応は予測されないことが示されている (Rickwood, 1995)。援助要請と深い関係にあるソーシャル・スキル (e.g. 永井・松田, 2014) についても, その内容によってアタッチメントの関連は異なることが示されており (DiTommaso, Brannen-McNulty, Ross, & Burgess, 2003), 同様にして援助要請も, 側面によって関連が異なることが予想される。援助要請のスキルに関するトレーニング等を行う際にも, どの側面にアプローチすべきなのかを明らかにする必要があり, 本研究では援助要請の各側面を分けて検討する。その際, 援助要請には男女差が示されているため (e.g. Schonert-Reichl & Muller, 1996), 性別の影響を統制した上でモデルの検証を行う。

なお, 年収と幸福感との関連が, ある一定の年収以上では一定となるといった著名な研究 (Kahneman, & Deaton, 2010) が示すように, 社会経済的地位と心理変数との関連は非線形的である可能性が考えられる。そのため, Figure 1のモデルを基にしながら, 非線形的な関連, 特に高い社会経済的地位での関連がその他と異な

るかについても探索的に検討する。

2. 方法

2.1. 研究参加者

研究参加者は、近畿圏の小学校1校の小学5、6年生162名（平均年齢 = 11.37歳，標準偏差 = 0.66歳）であった。研究参加者の内訳は、小学5年生76名（男女各38名）と小学6年生86名（男女各43名）であった。

2.2. 手続きと倫理的配慮

2019年1月に、無記名形式で質問紙調査を行った。調査は、クラスごとに一斉配布、一斉回収の形式で、各学級の担任教師によって実施された。質問紙の表紙には、本研究の目的に加え、正しい答えや間違った答えはないこと、分からないところや答えたくないところは答えなくて良いこと、プライバシーは保護されることを明記した。また回答前には担任教師から同様の内容が口頭で説明された。なお、研究対象者が未成年であるため、研究対象者が所属し、研究が実施される小学校長に対して研究内容等の説明を行い、研究参加の同意を書面で得た。

2.3. 調査内容

基本属性として、性別と年齢をはじめに尋ねた。その後、以下の各項目への回答を求めた。

2.3.1. 社会経済的地位

2012年のPISAで使用された、家庭にある本の冊数を尋ねる項目（国立教育政策研究所，2013）を用いた。PISA等で使われる家庭にある本の冊数は、社会経済的地位の代理指標になるとされている（e.g. 数実，2017）。「あなたの家には本が何冊ありますか。あてはまる番号に1つ○をつけてください。本棚1メートルにつき約40冊の本が入るとします。雑誌，新聞，教科書は数に含めないでください。」と教示し、「1. 0 - 10冊」，「2. 11 - 25冊」，「3. 26 - 100冊」，「4. 101 - 200冊」，「5. 201 - 500冊」，「6. 500冊以上」の6件法で尋ねた。

2.3.2. アタッチメント

中尾・村上・数井（2018）の児童版ECR-RS（Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire）を用いた。この尺度は、アタッチメントの個人差を測定する自己報告式尺度であるECR-RS（Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh, 2011）や、child version of the Experiences in Close Relationships Scale-Revised（Brenning, Soenens, Braet, & Bosmans, 2011）に基づき、児童が理解しやすいように、尺度項目の言葉遣いが簡略化、変更されたものであ

る。アタッチメントの2次元モデル（Fraley & Shaver, 2000）における、アタッチメント対象に見捨てられるかもしれない不安であるアタッチメント不安と、頼ったり頼られたりする親しい関係を回避することであるアタッチメント回避をそれぞれ測定する2下位尺度からなる。不安は「おうちの人は、自分をあまり好きではないかもしれない、と心配です」といった6項目、回避は「困ったことや心配ごとについて、たいてい、おうちの人と話します（逆転項目）」といった3項目の計9項目から構成されている。中尾他（2018）では、本尺度の構成概念妥当性および内的整合性と再検査信頼性が確認されている。回答形式は「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（4点）」の4件法で、得点が高いほど不安や回避を高くもつことが示されるよう得点化した。

2.3.3. 援助要請

本田・新井・石隈（2010）の援助要請スキル尺度のうち、本田他（2015）で使用された4項目を用いた。本田他（2010）の援助要請スキル尺度は、適切な援助者の選択、援助要請の方法、相手に伝える内容という3つの下位概念を測定する尺度であり、本田他（2010）では構成概念妥当性と内的整合性による信頼性が確認されている。その中から本田（2015）では、援助要請スキルの中核的な構成要素を最もよく反映する項目として「自分が何に困っているかを自分の中で整理することができる」（相手に伝える内容）、「自分のことを真剣に助けてくれそうな相手を何人か思い浮かべることができる」（適切な援助者の選択）、「困ったときの助けの求め方や頼み方を何通りか考えることができる」（援助要請の方法）、「その相手に何をしてほしいかを分かりやすく伝えることができる」（相手に伝える内容）の4項目が選択され、主成分分析や他概念との想定通りの関連などから、構成概念妥当性、内的整合性による信頼性が示されている。

本研究では、本田他（2010）と同様に、「次の文章には、あなたが周りの人（友だち、先生、お父さん、お母さんなど）に助けを求めるときに何が書いてあります。次の文章は、今のあなたにどのくらいあてはまると思いますか。あてはまる数字に1つずつ○をつけてください」と教示した。また、各項目の語尾については、本田他（2015）における修正を参考に、「ことができる」を削除し、実際にどの程度、困った場面で援助要請を行っているかを測定した。項目1では内容整理、項目2では援助相手の想起、項目3では要請方法の検討、項目4では援助要請をどの程度行っているかについて、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（4点）」の4件法で問い、得点が高いほど、困ったときに援助要請の各行動をしていることが示されるよう得点化した。

Table 1 各尺度の平均値と標準偏差および相関係数

	Pearson's correlational coefficient (<i>r</i>)						Mean	SD
	2	3	4	5	6	7		
1. 社会経済的地位	.03	-.07	.10	.20 *	.04	-.03	3.83	1.25
2. アタッチメント不安		.12	-.11	.02	-.02	-.13	1.83	0.79
3. アタッチメント回避			-.06	-.37 **	-.23 **	-.19 *	2.08	0.73
4. 援助要請 (項目1)				.12	.25 **	.27 **	2.91	0.91
5. 援助要請 (項目2)					.41 **	.26 **	2.77	1.05
6. 援助要請 (項目3)						.32 **	2.67	1.09
7. 援助要請 (項目4)							2.64	0.98

注) 援助要請 (項目1): 自分が何に困っているかを自分の中で整理する。
 援助要請 (項目2): 自分のことを真剣に助けてくれそうな相手を何人か思い浮かべる。
 援助要請 (項目3): 困ったときの助けの求め方や頼み方を何通りか考える。
 援助要請 (項目4): その相手に何をしてほしいかを分かりやすく伝える。
 得点範囲は、社会経済的地位が1-6、その他はすべて1-4。
 ** $p < .01$ * $p < .05$.

3. 結果

3.1. 尺度構成と記述統計量

先行研究での尺度構成に従い、児童版ECR-RSの各項目の得点を合計し、それぞれの平均値を各下位尺度の得点とした。ECR-RSの各下位尺度の内的整合性を検討するため、Chronbachの α 係数を算出したところ、不安では $\alpha = .83$ 、回避では $\alpha = .68$ というおよそ十分な内的整合性が確認された。また、社会経済的地位と援助要請については各項目の得点をそのまま用いた。各尺度と項目の平均値と標準偏差および相関係数をTable 1に示した。

3.2. 社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請との関連

社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請の関連について、Figure 1に示した仮説モデルを検討するため、パス解析を行った。なお分析はAmos 25を用いて行い、欠損値の処理には完全情報最尤推定法を用いた。

パス解析にあたっては、Figure 1に示した仮説モデルに基づき、社会経済的地位から援助要請の各項目への直接的な影響、アタッチメントを介した間接的な影響を想定した。ただし、アタッチメント不安と援助要請との関連は、Table 1に示した通りすべての援助要請の項目で低かったため、アタッチメント不安から援助要請の各項目へのパスは除いた。また、1尺度の下位尺度である

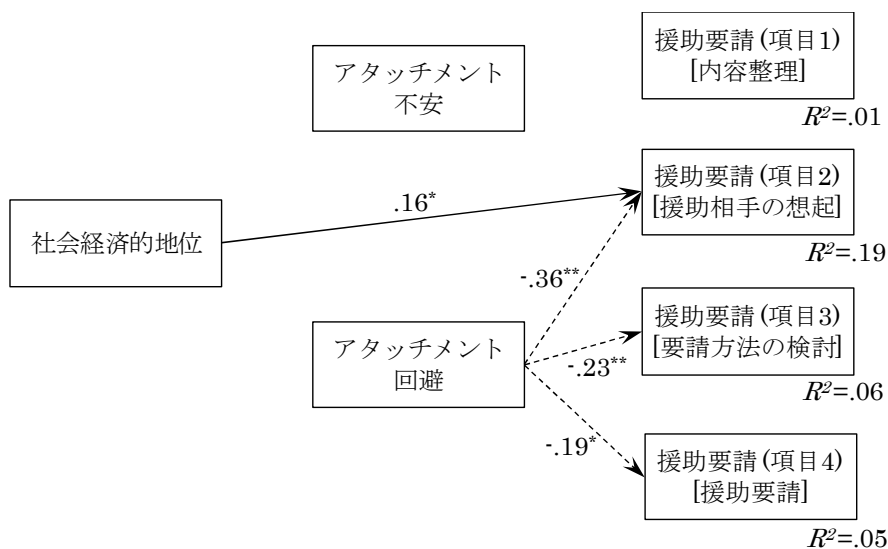


Figure 2. パス解析の結果(標準化推定値)

注1) 実践は正のパス、破線は負のパス、 R^2 は決定係数を示す。

注2) 誤差項と統制変数(性別) は省略し、有意なパス(** $p < .01$, * $p < .05$) のみ示す。

Table 2 社会経済的地位の得点ごとのアタッチメント不安とアタッチメント回避の得点

社会経済的地位	n	不安		回避	
		Mean	SD	Mean	SD
1. 0 - 10冊	1	1.00		3.17	
2. 11 - 25冊	18	1.91	0.70	2.27	0.82
3. 26 - 100冊	59	1.84	0.69	2.07	0.63
4. 101 - 200冊	33	1.80	0.85	2.01	0.64
5. 201 - 500冊	28	1.77	0.86	1.80	0.69
6. 500冊以上	21	1.98	0.96	2.25	0.96

アタッチメント不安とアタッチメント回避の間、1尺度の各項目である援助要請の各項目間には、共通の特徴があると考えられるため、それぞれの誤差項間に相関を仮定した。さらに、性別をダミーコード化してモデルに組み込み、統制した。分析の結果、モデルの適合度は十分な値であった (CFI = .989, RMSEA = .038, $\chi^2(4) = 4.91$, $p = .296$)。本モデルおよびパス解析の結果をFigure 2に示した。

社会経済的地位から援助要請への直接的な関連については、援助要請の項目2「自分のことを真剣に助けてくれそうな相手を何人か思い浮かべる」に対してのみ、正の関連がみられた ($\beta = .16$, $p < .05$)。社会経済的地位とアタッチメント不安 ($\beta = .03$, *n.s.*) およびアタッチメント回避 ($\beta = -.07$, *n.s.*) との間には関連がみられなかった。アタッチメント回避と援助要請の項目2「自分のことを真剣に助けてくれそうな相手を何人か思い浮かべる」 ($\beta = -.34$, $p < .01$)、項目3「困ったときの助けの求め方や頼み方を何通りか考える」 ($\beta = -.22$, $p < .01$)、項目4「その相手に何をしてほしいかを分かりやすく伝える」 ($\beta = -.20$, $p < .05$) の間には負の関連がみられた。

3.3. 社会経済的地位とアタッチメントおよび援助要請の非線形的な関連の検討

社会経済的地位とアタッチメントとの非線形的な関連を検討するため、社会経済的地位の得点ごとに、アタッチメント不安およびアタッチメント回避の得点を算出した (Table 2)。該当者が1人の0 - 10冊のアタッチメン

Table 3 社会経済的地位の各群におけるアタッチメントと援助要請の関連

	社会経済的地位 低・中群 (n = 139)		社会経済的地位 高群 (n = 21)	
	不安	回避	不安	回避
援助要請 (項目1)	-.07	-.08	-.36	-.01
援助要請 (項目2)	.02	-.33 **	-.04	-.62 **
援助要請 (項目3)	.02	-.19 *	-.14	-.50 **
援助要請 (項目4)	-.07	-.16 †	-.56 *	-.25

注) ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$.

ト不安では若干異なるものの、アタッチメント不安、アタッチメント回避の両方で、社会経済的地位が高くなるほど得点が低くなる一方、最高の500冊以上においては、両方の得点が高くなっていった。

日本では、PISAの社会経済文化的背景指標の上位に、およそ11%の子どもが位置づけられることが示されており (OECD, 2016)、本研究で用いた社会経済的地位の最高得点である500冊以上の割合 (およそ12%) もこれと類似するものである。そこで、社会経済的地位の得点が6点である社会経済的地位高群と、それ以下の得点である社会経済的地位低・中群とに研究参加者を分け、各群におけるアタッチメントと援助要請の相関係数を算出した (Table 3)。社会経済的地位低・中群と社会経済的地位高群とで各相関係数が異なるかを検討するため、相関係数の同等性の検定を行った結果、援助要請の項目4「その相手に何をしてほしいかを分かりやすく伝える」とアタッチメント不安の相関係数について有意差がみられた ($z = 2.24$, $p < .05$)。アタッチメント不安と援助要請の項目4の相関係数は、社会経済的地位低・中群ではほぼ無相関 ($r = -.07$) なのに対し、社会経済的地位高群では中程度の負の相関 ($r = -.56$) がみられた。

4. 考察

本研究の目的は、社会経済的地位と援助要請の直接的な関連、アタッチメントを介した間接的な関連を明らかにすることであった。小学生を対象とした質問紙調査を行い、Figure 1に示したモデルに基づき、検討を行った。また、非線形的な関連についても探索的に検討した。

4.1. 社会経済的地位と援助要請の直接的な関連

社会経済的地位は、援助相手を想起することに対して、直接的な関連を持つことが示された。相関係数およびパス解析の結果、社会経済的地位と援助相手を想起することを問う援助要請の2項目目との間に正の関連が見られた。援助相手をどれほど思い浮かべることができるかは、社会経済的地位の定義 (National Center for Education Statistics, 2012, p. 14) にある、人的資本に関わる資源の豊富さと関わるものと考えられる。社会経済的地位が高い場合には、自分のことを真剣に助けてもらえる相手、つまりそうした適応的な対人関係を築くことができている一方、社会経済的地位が低い場合には、そうした対人関係の乏しさがうかがわれる。貧困世帯で友人との遊びの場や時間が奪われている実態や、親が働きに出ているため、子どもが1人で過ごさなくてはならない時間が多いことなども示されている (e.g. NHKスペシャル取材班, 2018)。社会経済的地位によって生活時間の過ごし方が規定されるため、援助要請の相手を想起

するという側面との間で正の関連がみられたと考えられる。

4.2. アタッチメントを介した社会経済的地位と援助要請との間接的な関連の非線形性

アタッチメントを介した社会経済的地位と援助要請との関連は、非線形的であることが示唆される。相関係数およびパス解析の結果は、社会経済的地位とアタッチメントとの関連を示さなかった。一方、社会経済的地位の得点ごとにアタッチメントの得点を算出した結果、社会経済的地位の最高得点を除き、社会経済的地位の得点が高くなればアタッチメント不安とアタッチメント回避の得点が低くなることが示されている。しかし社会経済的地位が最高得点の場合には、アタッチメント不安とアタッチメント回避の得点は高くなっていた。Carey & Markus, 2017) は、社会経済的地位の高い養育者は、独立した自律的な自己を強調する傾向にあることを示している。Stephens, Markus, & Townsend (2007) においても、比較的低い社会経済的地位を含む労働階級層では他者との類似性が好まれる一方、より高い社会経済的地位においては他者との相違性が好まれることが明らかにされている。社会経済的地位が高いことで、子どもに対しても独立で自律的であることが強調されすぎると、子どもは安定したアタッチメントを発達させることが難しくなり、その結果として特に高い社会経済的地位ではアタッチメント不安や回避が高くなっている可能性が考えられる。いずれにしても、社会経済的地位とアタッチメント不安や回避との関連は、特に高い社会経済的地位を除いては負の関連があり、特に高い社会経済的地位においてはアタッチメント不安、回避が高くなるという、非線形的な関連の様相が示唆された。

アタッチメントと援助要請との関連についても、非線形的な関連が示唆されている。社会経済的地位の得点が最高である個人と、それ以外の個人とを分け、アタッチメント不安、アタッチメント回避と援助要請との関連の差異を検討したところ、アタッチメント不安と援助要請の項目4である相手に何をして欲しいかを伝えることとの関連に違いがみられた。社会経済的地位の得点が特に高い個人において、アタッチメント不安と相手にして欲しいことを伝えることとの間に負の関連がみられた。つまり、アタッチメント対象に見捨てられるかもしれない不安を持つほど、援助して欲しい内容を伝えることができないことが示された。上述の通り、社会経済的地位の高い子どもは、養育者から独立した自律的な自己を強調される傾向にある (Carey & Markus, 2017)。他者との違いを好意的に捉える価値観を持ち (Stephens et al., 2007)、自律的な姿をみせる養育者に対して、援助要請という他者との関係性を基盤とする行動を示すことは、

アタッチメント対象である養育者から見捨てられる不安からできなくなると考えられる。一方、養育者が自律性を必ずしも強調しない社会経済的地位の子どもたちは、援助を要請することとアタッチメント対象から見捨てられるかもしれないといった不安は関連しなかったと考えられる。

アタッチメント不安については社会経済的地位の得点によって援助要請との関連に違いがみられた一方、アタッチメント回避については、およそ一貫した援助要請との関連がみられた。相関係数やパス解析の結果は、アタッチメント回避と援助要請の項目2, 3, 4, つまり援助してくれる相手を想起すること、助けの求め方を考えること、そして助けて欲しいことを伝えることとの間に負の関連がみられた。頼ったり頼られたりする親しい関係を回避するような他者モデルを持つことは、社会経済的地位の様相に関わらず、これらの援助要請の側面ができないことと関連していることが示された。

4.3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究の結果、社会経済的地位は援助相手の想起と直接的な関連を持つことに加え、全体として、社会経済的地位の特に高い個人を除けば、アタッチメント不安および回避と関連しており、中でもアタッチメント回避が援助要請の相手や方法を考えること、そして援助して欲しい内容を伝えることと関連していることが示された (Figure 2, Table 2)。また、こうした関連は非線形的であり、特に社会経済的地位の高い個人については、アタッチメント不安および回避を高く持ち、不安は援助して欲しい内容を伝えること、回避はそれに加えて援助相手や方法を考えることと関連することが示された。こうした結果は、問題と目的で述べたような貧困を含む社会経済的地位の低い子どもの援助要請のできなさに加え、社会経済的地位が特に高い子どもたちの援助要請のできなさ、そしてそれによって抱えるかもしれない困難についても示唆している。

本研究で得られた基礎的な知見は、援助要請の観点から貧困世帯の子どもに対して求められる支援の内容や方法について示唆的である。社会経済的地位と援助要請の項目2との間にみられた関連から、社会経済的地位の低い貧困世帯では、そもそも人的資源が少なく、援助相手を思い浮かべにくいことが考えられる。そのため、援助要請が可能な人的資源を用意したり、公的資源などを含めた援助資源に関する情報提供をしたりすることが有用と考えられる。一方、アタッチメント回避から援助要請の項目2 - 4との間にみられた関連は、援助の相手や方法の考えにくさ、要請のしにくさには、回避的なアタッチメントが関わっていることを示している。そうであれば、単なる情報提供やスキル・トレーニング等で援助要

請の方法を教示することの有用性は慎重に検討する必要がある。また、高すぎる社会経済的地位とアタッチメントのネガティブな関連も示唆されているため、社会経済的地位に関わる支援の際には、アタッチメントの質に考慮する必要性が示唆された。

本研究には限界点や今後の課題も多い。上述してきたような非線形的な関連については、記述統計レベルの分析結果にとどまっており、特に社会経済的地位の高い研究協力者の数は少ないため、あくまでこれらの知見は示唆にとどめるべきである。また、本研究では、OECD (2016) での割合を基準として社会経済的地位の群分けを行ったが、PISAの社会経済文化的背景指標は、親の職業と教育歴、家庭の所有物に関する情報に基づいて構成されている。このうち、本研究が社会経済的地位の代理指標として用いたのは、家庭の所有物の一部である本の冊数であり、これらを同等として扱うことが妥当かどうか、今後の研究結果との一貫性などから慎重に判断していく必要がある。今後は特に非線形的な関連について、より大きなサンプルを対象として、他母集団同時分析等で実証的に検討していくことが課題である。

5. 付記

本研究の調査にご協力頂いた小学生の皆さま、校長先生、副校長先生をはじめ、調査を実施頂いた教員の皆さまに感謝申し上げます。また、調査結果の小学校へのフィードバックにあたり、高知大学教育研究部の福住紀明先生に貴重なご助言とご指導を賜りました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部 彩 (2012) 子どもの健康格差の要因——過去の健康悪化の回復力に違いはあるか—— 医療と社会, 22, 255-269.
- 阿部 彩・鈴木 大介 (2018). 貧困を救えない国 日本 PHP 研究所.
- 青木 紀 (2010). 現代日本の貧困観——「見えない貧困」を可視化する—— 明石書店.
- Bakermans-Kranenburg, M. J., vanIJzendoorn, M. H., & Kroonenberg, P. M. (2004). Differences in attachment security between African-American and white children: Ethnicity or socio-economic status? *Infant Behavior and Development*, 27, 417-433.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bollen, K., & Lennox, R. (1991). Conventional wisdom on measurement: A structural equation perspective. *Psychological Bulletin*, 110, 305-314.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Clinical applications of attachment theory*. London: Routledge.
- Bradley, R. H. & Corwyn, R. F. (2002). Socioeconomic status and child development. *Annual Review of Psychology*, 53, 371-399.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- Brenning, K., Soenens, B., Braet, C., & Bosmans, G. (2011). An adaptation of the Experiences in Close Relationships Scale-Revised for use with children and adolescents. *Journal of Social and Personal Relationships*, 28, 1048-1072.
- Calarco, J. M. (2011). "I Need Help!" Social class and children's help-seeking in elementary school. *American Sociological Review*, 76, 862-882.
- Carey, R. M., & Markus, H. R. (2017). Social class shapes the form and function of relationships and selves. *Current Opinion in Psychology*, 18, 123-130.
- DiTommaso, E., Brannen-McNulty, C., Ross, L., & Burgess, M. (2003). Attachment styles, social skills and loneliness in young adults. *Personality and Individual Differences*, 35, 303-312.
- Dujardin, A., Santens, T., Braet, C., De Raedt, R., Vos, P., Maes, B., & Bosmans, G. (2016). Middle childhood support-seeking behavior during stress: Links with self-reported attachment and future depressive symptoms. *Child Development*, 87, 326-340.
- Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23, 615-625.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (2000). Adult romantic attachment: Theoretical developments, emerging controversies, and unanswered questions. *Review of General Psychology*, 4, 132-154.
- 本田 真大・新井 邦二郎・石隈 利紀 (2010). 援助要請スキル尺度の作成 学校心理学研究, 10, 33-40.
- 本田 真大・新井 邦二郎・石隈 利紀 (2015). 援助要請行動から適応感に至るプロセスモデルの構築 カウンセリング研究, 48, 65-74.
- Kahneman, D., & Deaton, A. (2010). High income improves evaluation of life but not emotional well-being. *PNAS*, 107, 16489-16493.
- 荻谷 剛彦 (1995). 大衆教育社会のゆくえ——学歴主義と平等神話の戦後史—— 中公新書.
- 数実 浩佑 (2017). SESとは何か 福岡教育大学 (編), 児童生徒や学校の社会経済的背景を分析するための調査の在り方に関する調査研究 (pp. 10-17). 福岡教育大学.
- 厚生労働省 (2016). 平成28年国民生活基礎調査の概況 厚生労働省 Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/03.pdf> (April 26, 2019).
- 国立教育政策研究所 (2013). 生きるための知識と技能5——OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2012年調査国際結果報告書—— 明石書店.
- 耳塚 寛明 (2009). お茶の水女子大学委託研究・補完調査 について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/045/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/08/06/1282852_2.pdf (April 26, 2019).
- Moran, P. (2007). Attachment style, ethnicity and help-

- seeking attitudes among adolescent pupils. *British Journal of Guidance & Counselling*, 35, 205-218.
- 永井 智・松田 侑子 (2014). ソーシャルスキルおよび対人的自己効力感が小学生における援助要請に与える影響の検討—カウセリング研究, 47, 147-158.
- 中尾 達馬・村上 達也・数井 みゆき (2018). 児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み——児童版ECR-RSの日本語版作成—— パーソナリティ研究, 27, 179-189.
- National Center for Education Statistics. (2012). Improving the measurement of socioeconomic status for the national assessment of educational progress: A theoretical foundation. National Center for Education Statistics. Retrieved from https://nces.ed.gov/nationsreportcard/pdf/researchcenter/Socioeconomic_Factors.pdf (April 26, 2019).
- NHKスペシャル取材班 (2018). 高校生ワーキングプア——「見えない貧困」の真実—— 新潮社.
- OECD (2016). Results from PISA 2015. OECD. Retrieved from <https://www.oecd.org/pisa/PISA-2015-Japan-JPN.pdf> (May 1, 2019).
- Rawatlal, N., Pillay, B. J., Kliewer, W. (2015). Socioeconomic status, family-related variables, and caregiver-adolescent attachment. *South African Journal of Psychology*, 45, 551-563.
- Reiss, F. (2013). Socioeconomic inequalities and mental health problems in children and adolescents: A systematic review. *Social Science & Medicine*, 90, 24-31.
- Rickwood, D. J. (1995). The effectiveness of seeking help for coping with personal problems in late adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 24, 685-703.
- Schonert-Reichl, K. A. & Muller, J. R. (1996). Correlates of help-seeking in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 25, 705-731.
- Stephens, N. M., Markus, H. R., & Townsend, S. S. (2007). Choice as an act of meaning: the case of social class. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 814-830.
- Tippett, N., & Wolke, D. (2014). Socioeconomic status and bullying: A meta-analysis. *American Journal of Public Health*, 104, e48-59.
- Unicef (2012). Measuring child poverty: New league tables of child poverty in the world's rich countries. Unicef.
- 山路 茜 (2017). 中学校の数学授業における一生徒の文字式理解プロセスの質的研究——聴くことと援助要請に着目して—— 教育心理学研究, 65, 401-413.

